

専大校友を訪ねて

東京消防庁唯一の女性水難救助隊員



久々宇 邑乃さん (平28法)

水難事故の原因は橋からの転落や船舶の接触などさまざま。時間帯や気象条件も異なり、一つとして同じ現場はない。水難救助隊に

水泳歴が長く、昔から泳ぎに自信があった久々宇さん。専大ではサーフライフセービング愛好会に入り、毎年夏の2カ月間は千葉県九十九里の海で他大学の学生と集団生活をしながらライフセーバーとして活動した。沖に流された人を救助した経験もあり、「得意の泳ぎを生かして人助けがしたい」とこの道を目指した。

水辺での事故や災害発生時に、現場で人命救助や捜索活動を行う水難救助隊。東京消防庁では都内6署に約120人が配置され、地域の安全・安心を守るために日夜活動している。水難救助隊になるには、潜水士の国家資格を取得後、庁内の選抜試験に合格し、研修を修める必要がある。久々宇さんは2年前にこの難関を突破。足立消防署綾瀬出張所に所属し、東京消防庁で唯一の女性水難救助隊として活躍する。

厳しい訓練積み 命を守る最前線に

女性の水難救助隊になるのは、体力面の問題から難しいとされてきた。久々宇さんも、「力仕事が多く、20分を超える装備を背負っての作業は大変」と感じている。しかし度々挫折しかけたが、あきらめずに努力し、挑戦し続けたからこそ今の自分があると胸を張る。自ら先駆者となり、女性水難救助隊が広く活躍する未来を切り開いていく。

そのために日々厳しい訓練を積んでいる。潜水用プールに沈めた約60kgの人影を、2人1組で制限時間内に引き上げる救助訓練では、あえて目隠しをして水に潜るといふ。視界を奪われた状態でも、速やかに要救助者を発見し救助する実践感覚を養うためだ。

なつて初めて担当したのは、川に流された高齢者の救助で、そのときは無事故出することができた。「人の生死に直結する過酷な仕事だが、水難救助の最前線で働けることにやりがいを感じている」と誇りをのぞかせる。水の中では会話はおろか、濁りで視界が利かないことも多い。しかし人命救助は時間との闘いだ。隊員同士は互いに手にしたロープを引っ張って意思疎通を図りながら、迅速に救助・捜索を遂行しなければならぬ。「技術や体力はもちろんだ、どんな環境下でも冷静に行動できる精神力と息の合ったチームワークが不可欠」と語る。

専大松戸高で出張授業

商・神原教授「脱炭素社会」テーマに講演

高大連携

専修大学松戸高校(千葉県松戸市)と専大の3年生の専大クラスでは「社会科学入門」(担当:泉貴久教授)の授業の一環として、本学の教員による出張授業を行っている。

学習テーマを「改めて脱炭素社会を考える」とした11月の授業は、商学部神原教授、阪本将英教授、経営学部の福原康司准教授が担当した。



森林保全の意義を説明する神原教授

7日は神原教授が森林(波市)の山口圭司さんを保全を通じて脱炭素社会の現状と課題を取り上げた。ゲスト講師に松浦晃さん、山口好一さん、マブリー(兵庫県丹波市)の山口圭司さんを迎え、ICTを活用した林業について説明を受けた。実際に校庭で地理空間情報アプリを使っての樹木の直径の測定や、ドローンを飛ばして校内の

校庭でドローンの実演が行われた



緑地割合を調べた。続いて神原教授が「暮らしと森の関係」システム論から考える」と題して講義を行った。「森はあらゆる生活資源の供給源。脱炭素社会を考えると、森林の豊かさや金で買って、私たちは豊かな生活を送っているのだ」と指摘し、生態系や資源全体の構図や関係性を踏まえて脱炭素社会を考えることの重要性を強調した。質疑応答では、「みんなにとって公平・公正な社会とは何かを意識してほしい」という松浦さんの言葉に、生徒たちは深くうなずいていた。

源。脱炭素社会を考えると、森林の豊かさや金で買って、私たちは豊かな生活を送っているのだ」と指摘し、生態系や資源全体の構図や関係性を踏まえて脱炭素社会を考えることの重要性を強調した。質疑応答では、「みんなにとって公平・公正な社会とは何かを意識してほしい」という松浦さんの言葉に、生徒たちは深くうなずいていた。

3年ぶりに開廷 公開模擬裁判 付属3校の生徒が審理



3年ぶりに行われた公開模擬裁判

専修大学附属高校、専修大学松戸高校、専修大学北上高校の生徒61人が参加した公開模擬裁判(エクステンションセンター主催、専修大学法学部共催、東京弁護士会協力)が11月5日、神田キャンパスで開かれ

た。コロナ禍で2年連続中止となり、久しぶりの開廷となった。裁判官、検察官、弁護人役を附属高校と松戸高校の生徒が、そして北上高校の生徒が廷吏役を担当。実際の弁護士から指導を受けつつ、窃盗事件

就職だより

「3年次生へ」年明けの定期試験が終了するのと、いよいよ企業へのエントリーの時期が近づいてきます。これから就職活動の準備を始める人はもちろんですが、自身の進捗状況を確認するためにも就職支援システム「Sinet」で展開しているアーカイブ動画(就職ガイダンスや準備講座等)を参考に、年末年始休暇期間を有効活用して準備を進めてください。また、些細なことでも分からないことなどはそのままにせず、キャリア形成支援課にご相談ください。また、進路決定者は就職支援システム「Sinet」から「進路届」を必ず提出してください。

支援する会が多額寄付



松木理事長(左)に寄付金を手渡す桃野募金アンバサダー

桃野直樹募金アンバサダーが代表を務める「専大」が11月25日、3年ぶりに対

屯(たむろ)学生のすすめ

「屯田兵」という言葉をご存知だろうか? 明治時代に北海道の開拓と警備のために派遣された兵士だ。「屯」は「たむろ」つまり「集まる」という意味だ。私は、大学のキャンパスとは若者が「屯する」大切な場所だと思う。教場としての教室ではない。ガランとして授業が行われていない「居場所」としての教室だ。2年以上も続くコロナ禍において、このことはより痛切に感じる。大学は無論、学問をしにくる所だが、学生は本を読み講義に耳を傾けている時だけが学びの時間ではない。約束したわけでもなく、ダラダラと特に何をしようというわけでもなく「屯って」、ああでもないこうでもない、雑談に花を咲かせ、笑ったり、驚いたり、ぼんやりしたり、とにかくウダウダと過ごす。私は大学で働く者として、いろいろなやり方

でヒントを得て思考するが、かきこまった学会や研究会で閃きを得ることはあまりない。ほとんどは、同僚や友人、学生たちとする雑談からだ。つまり、言葉で商売をしている私にとって「有益な雑談」こそ、知的生活の基盤なのだ。そしてそのために不可欠なのは、何やらたわいもない理由で屯して、集って、話すことと、そのための居場所だ。「距離を取れ」との掛け声にはいくらかの理由があることは承知している。しかし、この「ダラダラする場面」が無くなることは、単なる交流機会の減少にとどまらない、「学びのもの」の喪失であると思う。諸君。スマホを切って、屯しようではないか。(学生部委員・岡田憲治)



緑地帯

校友会情報

22年度秋の叙勲・褒章
◇旭日双光章
山本雅紀氏(昭42商・北海道) 地方自治功勞

選挙結果

▽神奈川県二宮町長選挙(11月20日投票)
村田邦子氏(昭56文) 現

就任

永江正澄氏(昭55商) 諫早商工会議所会頭に11月1日付で就任。長崎県。

専修人の新しい本



前田 著

詩集 ひとりゆく思想
題作をはじめ、その時々心の動きを表現した30編を収録した。前田さんは高校時代から詩を書き始め、専大在学中は仲間とともに同人誌を発行。卒業後は詩誌の刊行にも携わった。(砂子屋書房・税込み2200円)